講演「トイレ磨きから学力向上まで」

京都市教育長　門川大作氏

京都市教育次長などを経て、2001年4月から現職。中央教育審議会「教員養成部会」「教員免許更新制」ワーキンググループの委員なども務める。

家庭、地域と助け合う

京都市の教育改革は今、堀川高に次ぐ「西京の奇跡」と称賛される西京高の躍進など、いろんな面で高い評価を得ている。教師力の向上とともに、家庭・地域が変わらなければ子供は変わらない。先人からのそんな取り組みの成果が実りつつある。

情報と課題を、家庭と地域とで共有し、行動の共有に高めていく。この十数年間、改革に次ぐ改革を実践してきた。今年も人事異動の1週間前倒しによる授業日数の増加や、全校へのクーラーの設置、国の学習指導要領を超える市独自の指導要領「京都スタンダード」の策定――など様々な改革を行った。

そして、講演の表題にも入れたトイレ磨き。昨年2月、40人の教師で立ち上げた「便きょう会」は今、130人に。毎月第2土曜に教師が子供や保護者と一緒にあちこちの学校をまわり、トイレを掃除する取り組みだ。「便きょう」の「きょう」は「教」「共」「響」などの意味がある。子供は最初、汚そうに掃除をするが、大人が手本を示せば一生懸命やり始める。たった2時間で子供は変わる。

こうした取り組みの背景には、京都ならではの伝統がある。京都では明治維新の危機の中で、「番組」という自治組織ごとに話し合って明治2年（1869年）に64の小学校ができた。日本で最初の小学校だった。

「竈金の精神」が今も伝わっている。地域の子供は地域で育てよう、そのために学校を作ろう、かまどのある家はみんなお金を出そう――。そんな精神だ。

みんながお金を出し、知恵を出し、汗をかき、学校をつくり、運営した。「自分の子供だけいい学校に」ではなく、公のためにみんなが努力した。その精神は京都の町衆に今も脈々と息づいている。

京都市では1992年から現在につながる教育改革が始まった。当時の教育長が連日学校訪問を重ね、議論した。「あの素晴らしい実践が全市に広まらないか」「あの厳しい学校、改革できないか」……。

定着までに時間はかかったが、教師の指導力はぐっと伸び、保護者との連携は深まった。

今、私たちが子供たちにどんな力をはぐくもうとしているか。まず学力向上。京都スタンダードなどの取り組みのほか、総合的な学習を重視している。教員研修を徹底し、教科との関連を絶えず検証している。総合学習をきっちりやることが学力向上につながった。

次に道徳教育。命を大切にし、あいさつをするなどの基本が、学校、市民くらしの中で実践できるよう、「しなやかな道徳」と命名して取り組んでいる。「便きょう会」もその一環だ。

全校での外部評価の導入や、保護者や地域の参画をより制度化した学校運営協議会（コミュニティースクール）の設置も推進している。昨年度17校で、今年度中に約50校に拡充する。全教師と地域の代表ら100人が参画する協議会もある。課題ごとに分科会で話し合い、共に実践する。

ここには現代に息づいている「竈金の精神」を見ることができる。保護者の間には「この取り組みを通じて先生と私たちが同じ方向に歩んでいると感じるようになった」との声がある。

手間はかかるが、こうした積み重ねで家庭や地域の教育力が高まり、それが学校の教育力を高める。学校と家庭、地域が批判し合うのではなく、互いに助け合う関係を築く。公教育を改革する道は、これしかない。成果も実感している。

多数の参加者が詰めかけた「読売・学力シンポジウム」

質疑応答

――教員人事評価は学校経営にどう活用すべきか。現職教員の免許更新制の今後の見通しは。

評価制度の大事なところは、評価する側の校長や教頭と、される側の教師が互いに「伸びしろ」に気づくこと。基本は教師のやる気を高め、教師全体の教育力を高めていくことにある。評価によって大きく給料を変えるのはよくない。

免許更新制は近く制度案がまとまるが、10年に1度のリフレッシュだ。だめな先生の排除が主な目的ではない。ただ、必要な人には必要な研修を受けてもらうことになる。

――学校力の向上は、教育委員会の指導で行うべきか、各学校で行うべきか。

校長のリーダーシップは欠かせないが、たくさんのリーダーを校長が束ねている姿が望ましい。校長が70点でも、地域や保護者、教師が加点すれば、100点、200点の成果があがる。権限はどんどん学校に委譲している。

教育委員会の指導主事は専門性を高め、その緊張感の中で双方が高まっていく関係が理想だ。

会場の声

教職への決意新たに

関西創価高校教諭
佐藤進さん(39)

「黒板に張り付いて授業をするタイプ。作業させたり、起立させたりして子供の集中力を保たせるテクニックを参考にしたい。これまで18年間の教師生活を見直すきっかけになった」

京都市立嵯峨小1年担任
山本真有子さん

「子供たちの素朴な疑問や関心を大事にすることを改めて教えられた。児童のことをいつも考えてはいるが、もっとアンテナを張り巡らし、様々なことを吸収して授業にいかしたい」

大阪教育大4年
松高広宣さん(22)

「大学では授業方法の指導はなく、学級崩壊などに直面したらどうすればよいか不安だった。今日、対応する技術があることを初めて知った。大学でも教えてほしかった」

大阪大谷大1年
中辻貴奠さん(19)

「百玉そろばんなどの模擬授業はすごく楽しく、自分が授業を受けている子供になったように引きつけられた。教師への決意を新たにすることができた」

主婦　浅野早苗さん(45)

「先生は子供を引きつける技術を身につけるべきと授業参観のたびに感じていただけに、自分の考えが間違っていないことを確信した。話を聞かない方が悪いという一部の先生の認識の甘さを痛感した。現役の先生には、表現方法などをもっと勉強してほしい」

真剣な表情で話を聞く参加者